様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月１０日現在

機関番号：１１６０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０７２０１９４
研究課題名（和文）　初期ソヴィエト出版政策史研究

研究課題名（英文）　A History of the Early Soviet Press Policy

研究代表者
浅岡　善治（ASAOKA　ZENJI）
福島大学・人間発達文化学類・准教授
研究者番号：８０３４７０４６

研究成果の概要（和文）：
初期ソ連、とりわけ党・ソヴィエト機関が未整備であった農村地域においては、出版活動とその周囲に形成された投書運動（通信員運動）が、権力と人民との相互関係においてきわめて重要な役割を担っていた。当該期の出版政策は、体制側がひたすら民衆の啓蒙教化を図るような一面的なものではなく、両者の一定の相互作用（「対話」）の促進を目指しており、その時々の政策課題に応じての試行錯誤と多様な方向性を孕んだものであった。

研究成果の概要（英文）：
In the early Soviet period, especially in rural area where party and Soviet apparatus were not well-ordered, the press and correspondent movement played very important parts in linking Soviet power with the people. The Bolshevik's press policy of those days didn't intend an one-way propaganda from the regime to the masses, but tried to promote "dialogues" between them, with repeated trial and error.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,100,000 円	330,000 円	1,430,000 円
２００９年度	1,000,000 円	300,000 円	1,300,000 円
２０１０年度	900,000 円	270,000 円	1,170,000 円
総　計	3,000,000 円	900,000 円	3,900,000 円

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：ソヴィエト、ソ連、ソヴェト、ネップ、出版、メディア、農村、農民

１．研究開始当初の背景

本研究は「初期ソヴィエト出版政策史研究」と題しているが、この場合、その周囲に形成された大衆的投書運動（通信員運動）をも包含する広義の「出版活動」として捉えている。こうした出版活動の総体は、初期ソヴィエトにおいては相当の重要性を有していたが、その特殊な存在形態ゆえに、政治組織や社会団体など、より実体性の高い対象と比べて、研究史上一般に軽視されてきた。すなわち出版研究については、穏健な制度史的アプローチが主流であり、そこから社会や体制全体のあり方を展望するようなスケールの大きい研究は長らく現れなかったのである。1980年代半ば以降の「グラスノスチ」の進展

によって、多くの大衆の手紙が公開されたことは史料上画期的な出来事であったが、それらのほとんどが新聞をはじめとする出版媒体に宛てて発信されていたにもかかわらず、もっぱら大衆＝社会の側から国家の側に対する一方的働きかけを示すものとみなされ、出版を通じた権力との相互作用という側面は軽視された。ゆえにこれらの史料をもとにまず現れたのは、「下から」の歴史像再構成の意図をもって世論や大衆心理、日常生活へのアプローチを試みた「社会史」的研究であった。やがてかかるコミュニケーションの双方向性に目を向けた研究も現れたが、そこでも手紙のテキスト分析に力点が置かれたために、すぐれて機能論的見地から問題を一般的に処理しがちであった。結局のところ、より大きな政策的射程を欠落させた先行諸研究においては、結論はしばしば一般論の域を出ず、かかる特殊な状況の意味性はいまだ十分に明らかになっているとは言い難いのである。それら膨大な量の手紙は「自然発生的」というよりは多分に意図的・政策的に組織されたものであり、こうした性格規定を欠いて、その「下から」の側面のみにこだわるとすれば、現実には手紙テキストの正確な理解すら時として覚束ないことになろう。

ソ連史を理解するためには、極めて具体的な対象について精緻な実証を試みる場合でも、独自のイデオロギーの意味性とその変化の機微に留意することが不可欠である。そして研究代表者の着想も、本来的にはこちらの方面に端を発している。末期ソ連の「ブハーリン・ルネサンス」とでも呼ぶべき状況に際して、研究代表者は、S・コーエンの優れた研究成果などによって、スターリンと並ぶ20年代の政治指導者の１人であったブハーリンが、ソヴィエト社会のあり方について独自のプランを持ち、その実現の方策として出版活動と通信員運動に大きな期待をかけていたことを知った。出版活動・通信運動関連についてのコーエン自身の叙述は多分に傍論的なものであったが、まずはブハーリン自身の著作そのものにあたることで政策理念的観点からかなり興味深い側面が見えてきた。そして、それらを加味すれば、従来の出版・手紙研究はもっぱら個別具体的な枠組みにとどまり、諸事象の豊かな理解に決定的に欠けているとの感が否めなかった。研究代表者は、当時人口の８割を占め、ボリシェヴィキの政策決定において決定的な意味をもった農民に対する出版活動・通信員運動の領域において、政策理念の側面を重視しつつ、それと末端の現実過程との相互作用を重視するアプローチをとったが、最初の数編の論考において、革命期から 1920 年代半ばまでについては、従来の研究が見落としていた数々のユニークな状況や事実を多々拾いあげることができた。全体として明らかになったのは、1920 年代中ごろにおけるボリシェヴィキの著しい親農民路線と、それを推進する上での出版活動・通信員運動の決定的な重要性である。農民の手紙の殺到は、かかる政策志向への正常な反応に他ならなかった。1926 年以降の諸過程については、1999 年提出の学位論文で素描を、その後の数篇の論文で主に政策理念レヴェルでの解明を試みているが、諸々の現実過程についての詳細な実証作業が課題として残されている。またそれらの作業を経てのみ、初期ソヴィエト全体の思想や政策理念について総括的評価も可能となるであろう。

２．研究の目的

初期ソヴィエト政権は、「革命」の担い手としての自己意識に大いに規定されつつも、他方で大衆との提携に努め、その有力な一方策

として出版活動の組織化に著しい努力を傾けた。さらに出版物の周囲における投書の組織化の試み（「通信員運動」と称された）は、大衆の側からの反作用の可能性を開き、転換期において権力と大衆とが向き合い、相互作用的働きかけを模索する状況が現出したのである。他の政治・社会組織がいまだ未整備だったことも影響して、出版活動とその周囲に展開された通信員運動は、当該期における権力と大衆との重要な接点となり、権力側からの諸施策や大衆の側からの諸要求がしばしば集中的に現れる場となった。そして何よりもかかる事態そのものが、ソヴィエト政権の特殊な政策志向や当時の一般的社会状況を色濃く反映していたのである。すなわち、出版活動と通信員運動は、党指導部の政策理念から末端農村の現実過程に至るまでの、初期ソヴィエト史の諸側面にアプローチする上での絶好の視座であり、その学問的精査は、現在、往々にしてスターリン体制の単なる形成期＝「通過点」とみなされている当該期における多様な方向性と可能性、革命が内包していた種々の「不発の」可能性の発掘と再検討とを促し、現行のロシア革命史像を修正する可能性を開くものである。

研究代表者のこれまでの作業を引き継ぐ形で本研究がまず対象とする1920年代後半は、ソ連史においてあらゆる方面で非常に際どい時期であり、当該期の政策の基調をなした穏健路線＝「新経済政策（ネップ）」の定着度についてもいまだ評価は定まっていない。第一に問題となるのは、これまでの研究代表者によって出版活動の側面から明らかにされてきた「親農民路線」の成果と帰趨である。程度の評価は異なるにせよ、従来の研究史は1920年代末－1930年代初頭の激動とスターリン政治体制の成立によって、多くの活動領域が著しい性格変化を被ったとみるが、この点については、出版活動も例外ではなかろう。そして通例「転換」の契機は、1927年末の穀物調達危機の発生におかれる。よって当面の作業上の第一の画期は1926－1927年となろう（この時期に対して、仮に「後期ネップ」という呼称を与えておきたい）。ここでは、出版活動の側面から、党指導部の政策路線とソヴィエト社会に内在する変化の意味性が、「転換」との関係性も含めて問われることとなる。続く1928年以降の分析においては「転換」の内容と性格、その帰着点を見定めつつ、研究の着地点を模索することになるが、現段階では1930－31年をおおよその目安と考えている。

以上のような1920年代後半から1930年初めまでの具体的実証作業を経て、最終的には、問題は個別から一般へと上向し、再び思想と理念の問題をも含めた、ロシア革命とソ連体制全体の再検討へと向かうことになるだろう。近年ソ連体制を「国家社会主義」と規定し、レーニンら指導者たちが当初から国家主義的な政策を追求したとする議論が一定の広まりを見せているが、これは現実から過去を遡及的に解釈し、同時に当時における理念的要素を軽視するものである。たしかに革命から内戦、ネップ、そして集団化と工業化という流転を経て形成された現実の体制は、「国家社会主義」と形容することが可能であろう。しかし結果からその過程を直線的に裁断するアプローチをもって、一定の試行錯誤を伴うその形成過程における様々な豊かな実践（出版活動や通信員運動は、まさにその最たるものであった）や、その根源にある思想のユニークさが看過されてはならない。碩学Ｅ・ホブズボームが20世紀の始まりと終わりをソヴィエト・ロシアの興亡を多分に意識して定義したように、ロシア革命は間違いなく前世紀を特徴付ける一大事件であった。そしてソ連解体からおよそ20年、21世紀に入っ

て10年を経てソ連は完全に歴史的存在となり、かつてのような熱烈な関心の対象ではなくなったが、我々はまだ「20世紀的なもの」の延長上に生きており、その行く末はいまだ定かではない。経済格差の深刻化など、20世紀の残務はいまだ多くが現実の問題であり続けており、今回研究代表者の提起するソ連期の諸経験の歴史具体的な解明は、単なる個別研究の枠にとどまらず、われわれの現在、そして未来についても示唆するところ真に大であると思われるのである。

３．研究の方法

研究代表者の従来の作業を引き継ぐ形で、1920年代後半におけるソヴィエト出版活動・通信員運動の現実過程が主対象となる。まずは党中央の内部文書や諸会合（党中央委員会総会、全連邦通信員会議、第15回党大会とその前後の諸準備会合など）の議事録・速記録・関連史料の検討から当該期の出版政策の基本的射程とその展開（変転）を明らかにし、そこから地方及び地方末端の実践へと徐々に下降するアプローチを採用する。ここで後者の検討に当たっては、新聞・定期刊行物の入念なトレースという基本的手法に立脚しつつ、適宜地方史料を追加する。

研究開始段階においては、研究代表者が研究実施機関に赴任して間もないこともあり、基本文献・新刊書・公刊史料等を中心とした一定の研究基盤整備・補填が必須であり、上の優先性の高いものから随時計画的に購入する。文書館史料については、一部国内所蔵が存在するので、それらの閲覧が最優先であるが、入手可能であるにもかかわらず国内所蔵がないもの、かつ利用性・汎用性が高いものに関しては、マイクロフィルム形態での新規購入を検討する。なお国内では完全にアクセス不能な文書館史料については、現地で直接閲覧せざるを得ないので、毎年、晩夏～初秋を目処にモスクワでの１ヶ月程度の史料調査を実施する。また同時に現地の図書館にて、同時代の定期刊行物・書籍の広範な渉猟も行う。さらに、最新の研究成果のフォローのため、ロシア現地でしか参照できない学位論文（博士候補論文）もできる限り参照し、論点のアップデートに努める。

４．研究成果

全ての年度において、秋季に約１ヶ月程度のロシア現地での史料調査を実施した。モスクワでは、ロシア国立図書館での同時代史料・学位論文の閲読のほか、ロシア国立経済文書館（ＲＧＡＥ）において、全国紙『農民新聞』が 1920 年代において数次にわたり実施した通信員アンケート・ファイルの分析に着手し、1920 年代半ばのセリコル・アンケートを 3 年かけてほぼ概観することができた。同史料は 1920 年代後半の農村末端の積極的投書主体の生の声を伝えるものだが、従来はロシア人研究者によってごく一部が抽出的に利用されたにとどまっており、今回の通観的分析の成果は、現在準備中の論文「1920 年代のソヴィエト農村のアクチーフ ― 社会的活動性と農民的土地利用（仮題）」などで随時利用していく予定である。ただし原史料はファイル数で 100 をこえる膨大なものであり、現時点では活用は概観的なものにとどまっている。今後は、さらに焦点を絞っての詳細な分析に努めたい。

さらに初年度のみサンクトペテルブルクに赴き、サンクトペテルブルク中央国立文学・芸術文書館（ЦГАЛИ СПб）にて、今のところ同館にのみ所蔵が確認されている 1920 年代の重要な検閲史料（「秘密該当情報・問題一覧」）の分析にあたった。同史料はロシア人研究者によってこれまでごく一部が紹介されているのみであったが、最初期

の２つ（1925 年と 1927 年のもの）について全文の訳出と注解、さらに詳細な比較分析を行い、ブリュムらによる先行研究の問題点を明らかにした（後掲〔雑誌論文〕(1)、(2)、〔学会発表〕(4)など)。今後も同種の文書の時系列での紹介を継続し、それらの相互比較を元にソヴィエト検閲活動の展開の具体的把握を期したい。

また松井康浩編『20 世紀ロシア史と日露関係の展望 ― 議論と研究の最前線』(後掲〔図書〕(1)）に寄稿した論文「権力と人民との『対話』― 初期ソヴィエト政権下における民衆の投書」においては、近年の研究動向の総括的再検討を行い、1997 年発表の論文以来の研究史の大幅なアップデートを行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

(1) 浅岡善治、「〔史料紹介〕初期ソヴィエト検閲史料（１） ― 1925 年の『機密該当情報一覧』」、『福島大学人間発達文化学類論集』、査読無、第 10 号、2009 年、11-22 頁。
http://ir.lib.fukushima-u.ac.jp/dspace/handle/10270/3333

(2) 浅岡善治、「初期ソヴィエト検閲史料(2) ― 1927 年の『機密該当問題一覧』、査読無、第 12 号、2010 年、1－16 頁。

(3) 浅岡善治、「<講演記録>初期ソ連における改革・改良・革命：『上からの革命』再考」、『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』、査読無、第 16 号、2011 年、81-96 頁。
http://www.agulin.aoyama.ac.jp/metadb/up/tadmin/N18U0081_096.pdf

〔学会発表〕（計 4 件）

(1) 浅岡善治、「『独裁』と『世論』 ― 1920 年代ソ連における改良・改革・革命、青山学院女子短期大学総合文化研究所「革命・改革・改良の比較研究」研究プロジェクト　第４回講演会、2009 年４月 21 日、青山学院女子短期大学。

(2) 浅岡善治、「後期ネップをどう見るか ― 出版活動の観点から」、ソ連東欧史研究会６月例会、2009 年６月 20 日、九州大学・伊都キャンパス。

(3) 浅岡善治、「後期ネップのソヴィエト農村(1926-27) ― 出版・投書政策からのアプローチ」、第 15 回社会経済史学会東北部会、2009 年 12 月 12 日、東北大学大学院・経済学研究科。

(4) 浅岡善治、「『タルムード』の前史 ― 初期ソヴィエト検閲制度の展開(1922-1927 年)」、福島大学史学会、2010 年 11 月 23 日、福島大学・人間発達文化学類。

〔図書〕（計１件）

(1) 松井康浩編・浅岡善治分担執筆、九州大学出版会、『20 世紀ロシア史と日露関係の展望 ― 議論と研究の最前線、2010 年、63-86 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

浅岡　善治（ASAOKA ZENJI）
福島大学・人間発達文化学類・准教授
研究者番号：８０３４７０４６